日文教育資料［生活・総合］

生活&総合 navi

vol.73 MARCH 2017

［特集］

キャプションにこだわると写真が変わる・取材が変わる

［連載ページ］

Belief
カリキュラムマネジメントゼミ
アクティブ・ラーニング教室
研究と実践
ご当地情報局
生活・総合への提言
教育研究機関の現場から
生活科を理科とつなぐ・社会とつなぐ

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

本資料は、「教科書宣伝行動基準」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！ 日文 検索

Belief

紙芝居師 なっちゃん

かみしばいし なっちゃん

石川県生まれ。大学卒業後、アナウンサーや役者として活躍。2009年より紙芝居師として活動を開始し、全国各地で自ら制作したご当地紙芝居や古事記紙芝居を展開。震災復興地での紙芝居活動も継続して行っている。2015年には「いしかわ観光特使」に。

震災復興地で、元気と笑顔を届ける活動を継続中。

心も体も寄り添って

紙芝居師なっちゃんの誕生

紙芝居師になるきっかけは、アナウンサー時代に、子ども向けの本を紹介するコーナーを担当していまして、そのなかで紙芝居をしたことです。放送後の視聴者の反響が大きく、多くの方にほめていただいた。そのときの楽しかった記憶がずっと残っていて。唯一ほめてもらった紙芝居を特技としてフリーアナウンサーをしていたころ、インターネットで、「紙芝居師」という職業があることを知りました。アナウンサーの仕事もしていたのですが、徐々に紙芝居の仕事の方が増えてきたので、「紙芝居師なっちゃん」としてやっていくことにしました。

紙芝居とボランティア活動

紙芝居をする場所は、全国各地の幼稚園や小学校、イベント会場など様々です。継続して訪問している学校もたくさんあります。そこでは、体操やクイズなどを盛り込んだ紙芝居や、防災、ご当地トリビア、古事記などをテーマにした自作の紙芝居を披露しています。子どもたちはもちろん、ご高齢の方にも笑顔になってもらえるので、うれしいですね。

震災復興地での活動も行っていて、今年で6年目を迎えます。最初に受け入れてもらえたのは茨城県のひたちなか市でした。そこではボランティア活動と紙芝居をしたのですが、紙芝居は単なるツールで、それよりも現地の子どもたちとどう仲良くなるか、どう感情を受け止めるかに必死でした。希望を感じたのは、行く先々で彼らがスキンシップをたくさんしていたこと。ありがとうのハグは日常的に行われていたのが印象的でしたね。スキンシップをすることで、大人たちが子どもを守っていたんじゃないかと思います。私もたっぷりスキンシップをしましたよ。スキンシップで体を寄り添わせることももちろんですが、震災復興地では心も寄り添うことを特にこころがけています。

寄り添うという温かい気持ち

小さいころは、友だちが笑っていたら自分もにこにこしたり、泣いていたらもらい泣きしたりするような子どもでした。友だちの気持ちに寄り添っていたから、同じような感情表現になっていたのかもしれません。そして、私自身も周りの人から寄り添ってもらえていたからこそ、自然にできていたんだと思います。先生方にも、もっと子どもたちに寄り添ってあげてほしい。それが、子どもたちにとってパワーになるんじゃないかと思います。また、子どもたちは寄り添ってくれたという温かい気持ちをずっと覚えてくれていると思います。

特集 キャプションにこだわると写真が変わる・取材が変わる

［3〜6年］総合「笑顔のひみつ プロジェクト」の実践より

中川斉史（徳島県三好市立下名小学校）

今や誰でもデジカメで撮影できる時代。しかし写真のキャプション，アングル，言葉での取材，表現方法にこだわると，写真をベースとした年間を通しての実践が可能だ。

小規模校だからできる地域密着型プロジェクト

プロジェクトのきっかけ

徳島県三好市立下名小学校は、観光スポットである大歩危峡の近くにある。山あり、谷あり、川ありの自然豊かな環境にたたずむ小学校で、地域の人にスポットを当てたプロジェクトを展開している。下名小学校は小規模校ということもあり、学校の行事や校外活動において地域の方とのかかわりが大きい学校である。実践者の中川斉史教頭は、そのかかわりを「地域の人たちの笑顔のひみつ」というテーマで、児童たちが実際に取材・撮影し、表現するとよいのではないかと考えた。写真によって、被写体の人生や仕事などを引き出すことができれば、キャリア教育や地域社会にも関連した複合型の学習ができる。また、取材をして、写真を撮り、それをまとめること、発信することとはどういうことなのかといった「メディアリテラシー」も意識してやっていきたいと考えた。プロジェクト名は、「笑顔のひみつプロジェクト」だ。

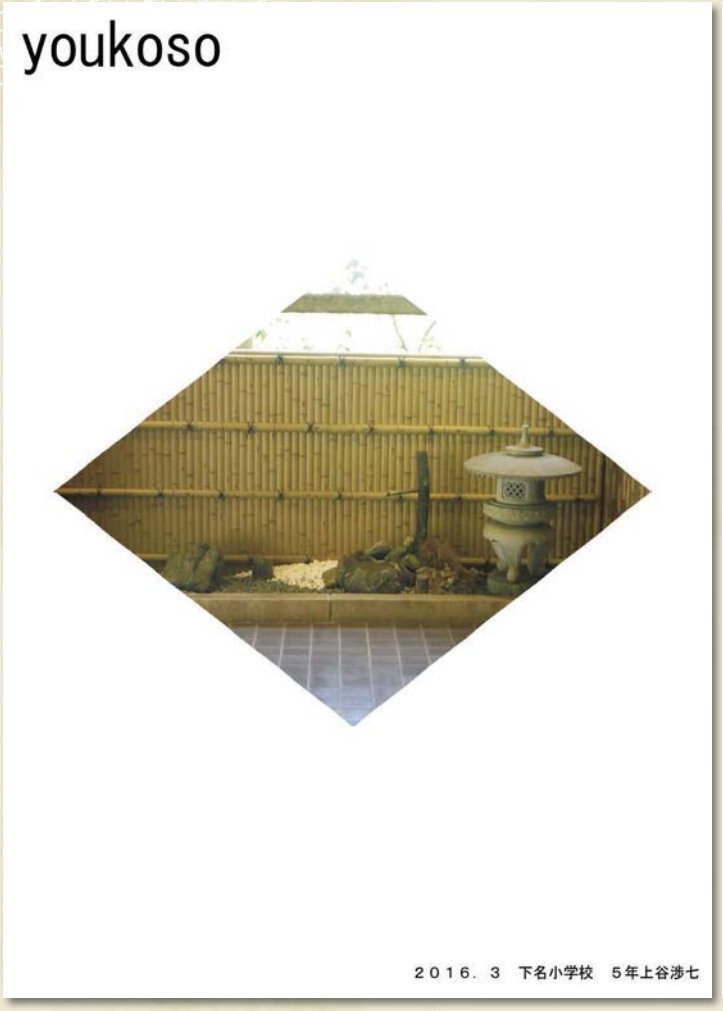
プロジェクトでは、取材・撮影→編集作業（写真レイアウト、キャプション作成）→写真展という工程を、取材対象を替えながら三度繰り返す。その集大成としてパンフレットを制作し、読者発表会を行った（P4～5中段参照）。

雑誌の分析からはじめよう！

以前、写真のみを展示したことがあったが、このプロジェクトでは、写真とキャプションを組み合わせた作品を展示することにした。そうすることで写真の見方や意味がより表現されると考えたからだ。

そのために、旅行雑誌やファッション誌などを分析することからはじめた。まずは、雑誌に掲載されている写真には縦、横の置き方があることや、キャプションが付いていることを気付かせた。キャプションは理科や社会の教科書にたくさん出てくる。そういうことも含めてキャプションを身近に感じさせたいという思いがあった。

分析の結果、子どもたちは、写真の構図や置き方、キャプションによって写真のイメージが大きく変わることを知った。そして、単に写真を撮るだけではキャプションを付けることができないということに気付いた。そのためには取材をきちんとしなければならない、



パンフレット『YOUKOSO』
上谷渉七（5年）作品

と。その気付きから、取材の練習へとつながっていった。

取材の練習と本番

取材の練習対象は、校内の先生方だ。まずは、インタビューと写真撮影の方法を知ること。また、写真を撮る、質問する、メモをとるという3名一チームで効率よく、正確な記録方法を身に付けることも練習した。

だんだんと取材がうまくできるようになってきたため、いよいよ本番。校外に出て、地域の方への取材に出かけた。一回目は、観光ホテル、レストランで働いている方を対象にした。下名小学校のある地域は観光地であるため、客相手の仕事をしている方が多い。どんな仕事をしているか、どんな接客をしているか、その人はどんな人なのか、を引き出すように取材する。そして、その人の仕事がわかるような写真を撮影した。

二回目は、駅やスーパーマーケット、駐在所、タクシーなど、近隣施設で働く人だ。前回の取材が生かされたようで、キャプションを付けるにはどういうことを聞かないといけないのか、どのような写真を撮ればいいのか、など少しコツをつかんだようだった。また、効率よく取材できるようになるにつれ、時間も短縮できるようになっていた。

三回目は、お年寄り交流で老人会の方に取材。子どもたちは、その人の人生がにじみ出るような写真を撮影、取材ができるようになっていたことが印象的だった。

こうして、取材対象を替えつつ、繰り返し活動を続けることで、取材も写真も格段に向上した。

取材する方の人となりを，丁寧に引き出していく。

遊覧船の船長を撮影，取材。撮影のコツは引いた構図で撮ること。

地域への恩返しをしつつ自分に自信がもてる

パソコンで編集作業

写真展に向け、パソコンで作品をつくる。「はっぴょう名人（ジャストシステム）」というソフトを使い、写真のトリミングをする。子どもたちには実際のトリミングは難しいため、A4縦の用紙枠に対して、拡大をしながら印刷範囲を決めるという方法をとった。その後、取材メモからキャプションを作成し、レイアウトする。作品が完成したら、友だちに見てもらい、アドバイスをもらう。何か基準がないとアドバイスしづらいため、チェックシートを用意し、それを参考にさせた。友だちからのアドバイスを受けた児童は、それを踏まえて修正し、より自らが意図した作品に仕上げていく。

自分がつくった写真展の作品がプリンターから出力されるのを，どきどきしながら見守る。

写真展開催！

たくさんの方に見ていただこうと、道の駅で写真展を開催。準備から広報活動（チラシの配布）、当日のお客さんの呼び込み、写真説明まで、児童自ら行う。また、開催期間中には作品の入れ替えも行った。

アドバイスするときに基準となるチェックシート。文字の見やすさや写真のレイアウトなど細かい項目が並ぶ。

チェックシート

1　よみやすさ
- ○フォントの種類
- ○色

自己満足になっていないか！自分が楽しむためのものになっていないか！好みではあるが、みんなに受け入れられるかどうかは別

2　文章のまちがいはないか
- ○読点の場所
- ○文章がつながりすぎてないか
- ○せつぞくし（しかし、だから、そのため、そして）はおかしくないか

3　写真の顔
- ○トリミングの位置
- ○視線は・・・・
- ○本人も満足する顔か

以上をふまえて、アドバイスを書こう

プロジェクトの流れ

1 雑誌の分析
雑誌を見て，写真の構図（縦，横），レイアウト，キャプションを分析する。

2 取材の練習
校内の先生方を相手に，取材の練習をする。

3 取材活動
地域の方（働いている人，老人会の方）に取材。

4 データ作成
パソコンを使って，写真のトリミングとキャプションを付ける。これが写真展の作品となる。

写真展では感想を書くノートを置いていた。そこにはたくさんのコメントが寄せられた。たとえば、児童の姉、兄であったり、下名小学校の先輩たちだったり。先輩たちは、「すごいじゃん！」と、べたぼめで、すごく喜んでくれていた。また、観光客からの英語や中国語のコメントもあった。ほかにも他校の小学生から「すごい！自分たちの学校はこんなことしてないよ！」というコメントをもらうことで、子どもたちは、このような活動は普通のことだと思っていたが、そうではない、ということに改めて気が付いたようだ。「自分たちってすごい！」、「たくさんの人に認められているんだ！」、ということに気付かせることがねらいでもあり、大きな財産となった。

人とのかかわりと地域・社会への貢献

下名小学校は山間部にあることから、地域の学校という位置付けである。よって、地域の方からの協力が大きい。保護者が活動に参加するのはもちろんだが、元PTAの方が「何かしてあげるよ」ということがよくある。地域のお年寄りの方は、「わしの孫じゃ」、「子どもは宝だ」という思いをもってくれている。また、活動に参加することを生きがいにしてくれている方もたくさんいる。そういう思いを、子どもたちが肌で感じつつ、年間五、六回いろいろなかたちで関わってもらっている。

取材や写真展をすることで、子どもたちが見つけた地域の方のたくさんの魅力を様々な人に紹介することが、まさに「地域への恩返し」である。これが、小規模校と地域とのかかわりのよさではないか。こうした地域の方との中で培った感性が、自分の中の軸としてあれば、故郷を、自信をもって紹介できる。さらには、自分のやっていることに自信がもてる。こういった交流が受け継がれているからこそ、地域の方と密接に結びつき、開かれた学校につながるのであろう。

感想ノートのコメントを読み、喜ぶ児童たち。

ICT活用とメディアリテラシー

このプロジェクトでは、タブレットとノートパソコンを活用している。昨今、便利なため学校でのタブレット利用が進んでいるが、この活動はタブレットだけでは絶対にできない。レイアウトを考えながらキャプションや記事を書くには、タブレットではなく、ある程度画面の大きいパソコンが必要だ。ただし、プレゼンテーションはタブレットでないとスムーズなズームができない。そういうICTの特性を子どもたちにも感じさせながら、目的によってメディアを使い分けることが重要である。

中川先生がメディアリテラシー教育において特に意識していることは二つある。一つは、子どもにしっかりと発信させ、書く内容に責任をもたせること。もう一つは、複数の先生が協同するということ。下名小学校では、学年解体してチームを組んで総合活動を行っている。よって、活動がそのまま教員研修も兼ねることになり、質の高いICTやソフトの使い方を示すことができるのである。

子どもは実際に記事にする決められたフレームに当てはめようとすると、写真の全体を撮ることが大事ということが体でわかるようになる。そういうところはメディアリテラシーとしてすごく意識をしているところでもある。

つくったデータは使い倒せ

取材メモ、撮影した写真、写真展に向けてつくった作品のデータはとことん再利用する。それをいろいろなかたちで出力、編集していく。それによってできたものがパンフレットであったり、プレゼンテーション資料であったりする。都度一からつくる必要がないので時短につながるし、負担を軽減できる。子どもたちはこれまでにつくったものを何度も使うことで、自分の作品に愛着をもつ。年に三回、取材から写真展まで、同じことを繰り返しながらグレードアップできたのは、このおかげである。

児童にタブレットとパソコンのどちらか好きな方を選ばせると，パソコンを選ぶ。キーボードで打つことがしっくりくると感じたようだ。

7 読者発表会（プレゼンテーション）
地域の方を招き，タブレットを使ってプレゼンテーションを行う。

6 パンフレット作成
4でつくったデータを流用し，さらに今までの取材をパンフレットにまとめる。

5 写真展を開く
道の駅にて，写真展を開催。客寄せ，写真の説明も行う。
※3〜5は，対象を変えて繰り返し活動する。

短縮した時間は、その分、活動の回数を増やし、学びを深めることにあてることができる。子どもたちにも先生にも双方にメリットがあると言えよう。

本物のもつ力は大きい

中川先生は、「教育は子どもたちの生きる力のためにある。」と考え、できるだけ本物に触れさせるということを大事にしてきた。発達段階を考えた場合、ダミーで行うこともあるが、本物で実践すると子どもの本気度がちがう。だから、地域にある本物を使いつつ、本物に近づけるようにしていきたい。写真であれば小学生でも扱いやすく、本物に近づきやすい。デジタルカメラは今やどこの学校でもあるので、どの先生、どの学校でもすぐに実践できる。撮ったものをどういう風に生かすか、表現方法を変えることで、よりおもしろい活動になる。「かっこよく」、「センスよく」仕上げるという表現方法、その感覚が「本物」に近付くことであろう。センスは本物に触れないと磨けない。だから本物に触れさせることを活動に生かすのである。

学校現場では，総合学習に限らず，多くの学習活動の中でデジカメを使うと思います。記録手段としてだけではなく，表現手段としてとらえることのできる活動を，総合学習でやっておくことはとても大切なことだと考えます。

徳島県三好市下名小学校　教頭
中川（なかがわ）　斉史（ひとし）先生

1965年徳島県生まれ。徳島県内の公立小学校の教員として約30年勤務。複数の学校のほか，教育ネットワークセンター，教育研究所研究員，主幹教諭を経て，現職。総務省地域情報化アドバイザ，教育情報化コーディネータ1級。教育の情報化や情報教育などを専門としている。

Curriculum management seminar

村川先生のカリキュラムマネジメントゼミ

村川 雅弘

鳴門教育大学大学院教授。専門は教育工学，カリキュラム開発，生活科・総合的な学習。近著に『ワークショップ型教員研修　はじめの一歩』（教育開発研究所）がある。

カリキュラムマネジメントの最終ゴールは子ども一人一人の学びのカリマネ

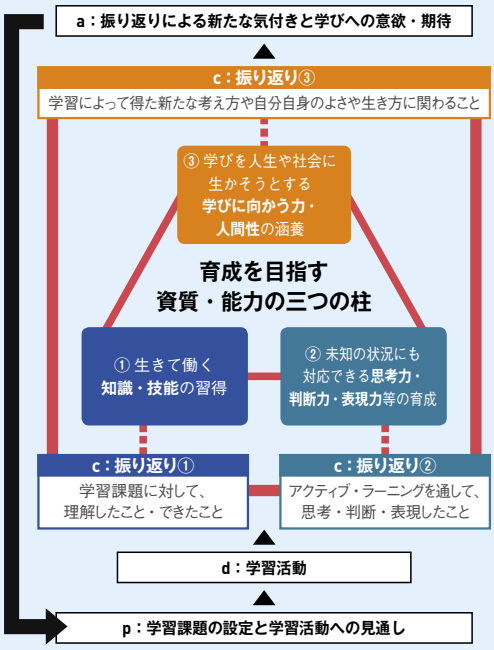
[子どものカリマネのpdcaサイクル]

カリキュラムマネジメント（以下，カリマネ）には「学校のカリマネ」「各教科等のカリマネ」「学年のカリマネ」「学級のカリマネ」といった「教師の指導のカリマネ」に対して，「子ども一人一人の学びのカリマネ」があり，カリマネの最終ゴールと考える。

今次学習指導要領改訂では，先行き不透明な時代を生き抜くとともに未来の社会を創るこれからの子どもたちに求められる資質・能力として，①「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」，②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」，③「どのように社会・世界とかかわり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つを示している。

単元や授業の終末部分で行われる子どもによる振り返りも同様である。例えば，「森と川と海がつながっていて，森を大切にすることで海が豊かになることがわかりました（振り返り①），「森チームや川チーム，生きものチームなどが調べてきたことを発表し合ってつなげたから関係がわかりました（振り返り②），「これからもいろいろなことを比べたりつなげたりして考えていきたいと思いました（振り返り③）」といった「育成を目指す資質・能力の三つの柱」に則した振り返りが期待される。このような振り返りを通して新たな気付きや意欲・期待が芽生え，次の学習課題の設定や学習活動の見通しへとつながる。

そして，「育成を目指す資質・能力の三つの柱」を踏まえた振り返りを核とした「子ども一人一人の学びのカリマネ」のpdcaサイクルを繰り返すことで様々な課題に対し学び続ける子どもが育ってくる。



子ども一人一人の学びのカリマネ　（八釼・村川・三田　2016）

「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」「育成を目指す資質・能力」との相関図

MANAGEMENT POINT　**常に子ども一人一人の学びを意識する**

- ■ 地域や子どもの実態に基づき学校のカリマネを作成する
- ■ 学校のカリマネを踏まえて各教科等や学級などのカリマネを作成する
- ■ 子ども一人一人の学びのカリマネを計画的に支援する

「社会に開かれた教育課程」の実現，つまり社会とのつながりを重視し学校の特色づくりを図りながら，現実社会とのかかわりの中で子ども一人一人の豊かな学び（資質・能力の育成）を実現するためには，地域や子どもの実態に基づき学校のカリマネを計画することが求められる。その上で，各教科等の当該の単元や学級の子どもの実態に応じたカリマネの計画，実施，評価，改善を行う。例えば，身近な川を対象に環境問題に取り組む上で，子どもの既有の知識・技能や体験を踏まえて，目標や内容，活動を設定し，学習環境や支援体制を整え（P），実施し（D），見直し改善を図る（CA）。こうした教師の一連の指導を通して，子ども一人一人が自ら課題を立て（p），他者との主体的で対話的なかかわりを通して追究しながら深く学んでいく（d）とともに，自己の成長を自覚し（c），次への学びへとつなげていく（a）。

野口先生のアクティブ・ラーニング教室

野口 徹

山形大学准教授。専門は生活科・総合的な学習。著書に『子どものくらしを支える教師と子どもの関係づくり』（ぎょうせい，共編著）など。

“本物”の映画をつくる体験から“本物”の課題に向き合う

平成28年12月21日に中央教育審議会が次期学習指導要領の改訂について答申しました。約二年間に渡った審議の中で特に話題の中心となったのが「アクティブ・ラーニング」でした。これについて答申では，子どもが「主体的・対話的で深い学び」を実現するために三つの視点を示し，アクティブ・ラーニングの質を担保するよう求めています。

［主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善の三つの視点］

1. 子ども自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりする**「主体的な学び」**
2. 子どもが身に付けた知識や技能を定着させ、物事の多面的で深い理解に至るために，多様な表現を通じて、教職員と子どもや、子ども同士が対話し、それによって思考を広げ深めていく**「対話的な学び」**
3. 子どもたちが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力をさらに伸ばしたり、新たな資質・能力を育んだりしていく**「深い学び」**

今後の教師には，指導すべき内容をしっかりと教える場面と子どもたちが自ら思考・判断・表現する場面との両方を効果的に使い分ける高い指導力が求められることでしょう。そして，そうした指導力を教師が獲得するには，**子どもがどこまで「主体的・対話的で深い学び」を実現し得るのか**，という具体的なイメージを持っていることは必須になるでしょう。

今回紹介するのは，総合的な学習において小学生が「映画」の企画・立案・制作など全てを行い，さらにはこの映画を「ロードショー映画館」で上映することに成功したというものです。これは，山形市立南小学校の6年生が行った取り組みです。

この学習は，各クラスから選出された「総合係」の児童を中心として「自分たちの生活で問題に思っていることは？」というテーマで話し合いを重ねたことから始まります。この学校では，子どもの日常的な課題意識や願いを表現し合うことを基盤に総合の内容を決めています。この話し合いで自らの生活の中にはケンカや悪口などのトラブルが頻発していること，そして，それに誰もが不安を感じていることを浮き彫りにしていきます。そして，ここから「いじめのない，みんなで助け合う学校生活を目指す」という目的と，「いじめ撲滅をテーマにした本物の映画をつくろう！」という学習内容を**「主体的」**に決めて，学習活動の見通しをもつに至ります。

「本物の映画を」ということにはなりましたが，当然のことながら子どもたちには映画をつくる経験がありません。まずは映画制作にはどんな仕事があるのかを調べること。そして，それらに対してアドバイスをもらう「キー・パーソン」を探すこと。これらに子どもは取り組みました。プロデューサー・監督，脚本，撮影，出演者，衣装・美術，BGMや主題歌・肖像権等の権利管理の仕事などがあることがわかりました。「監督」「撮影」「美術」係の子どもは、学校の近くにある東北芸術工科大学映像学科やテレビ局，洋服店などと，「肖像権」係は司法書士事務所と交渉を行います。「出演者」係は児童劇団の指導者の方に連絡を取り，さらに「上映場所交渉」係は、「本物の映画館で上映してこそ達成感がある。」と考え，何館もの映画館との困難な交渉を重ねていきます。これらを通して，東北芸術工科大学の教授で映画監督の林海象氏や学生たち。テレビ局の報道制作局長，映画館の方などの専門家との出会い。さらに，友だちとも話し合いを重ねる**「対話的」**な連携から，新たな学びが広がっていったのです。

実際に映画を制作していくと，次から次へと困難に遭遇します。例えば出演者が病気で長期的に休むことになってしまう。映画の中で音楽家小田和正さんの楽曲を使いたい。しかし，それには小田さん本人の許諾が必要であることが判明する。どれも子どもたちの予想を超えた難題です。本気で取り組むからこそ出現する課題であると言えましょう。これらの課題を意識した子どもたちは一人ひとりが自分にできることはなにかないだろうかと話し合い，そして新たに行動を始めるのです。そこでは，これまでに学校の様々な場面で学習してきた「見方・考え方」を総動員して立ち向かっていきました。小田さんからも映画の趣旨を理解してもらい，音楽の使用許可をいただくことができました。こういったいくつもの「本物のドラマ」を乗り越えて生まれた映画が「友達ロックオン！—きっとそばにいるから」です。2016年11月にロードショー館で行われた上映会には小田和正さんからの花束も届けられました。多くの方に見ていただくことで子どもたちは大きな喜びを味わいました。しかし，彼らのゴールはここではないのです。学校や普段の生活の中から「いじめ」をなくすこと。この目的の達成に向けて彼らはこの映画をより多くの人に見てもらうことを計画しています。まさに新たな生き方が見えてきた**「深い学び」**の実現がなされようとしています。

この実践からは，子どもたちがどれだけ「本物の課題」に向き合うか。これがアクティブ・ラーニング実現の鍵となることが言えるのではないでしょうか。

子どもたちが制作した映画のチラシ

骨を触りながらじっくり「けんきゅう」する子どもたち。下顎の骨と頭蓋骨をあわせてみると，ぴったりと合った。

幼稚園の現場から

学びの芽生えを培う保育実践

［5歳児］「何の骨かな？」の実践より

齋藤 彰子（宮城学院女子大学附属認定こども園「森のこども園」保育教諭）

1 はじめに

本園では、「？」（不思議に思う心）「！」（感動の心）「♡」（思いやりの心）の三つの心を育み、就学までに「学びの自立」「生活の自立」「精神の自立」へ繋げていくための教育課程を実施している。また、その教育課程のもと、子どもたちが発見や疑問に出会ったときに、教師や仲間と共感し合うことや、ともに問題解決に向けて仲間と協同して活動を進めていくことを大切にしてきた。このような実践が、本園の目指す「学びの自立」につながると仮定し、野外遊びを中心とした5歳児の実践事例をもとに、「学びの芽生え」を培う保育の在り方について考察したい。

2 実践事例「何の骨かな？」

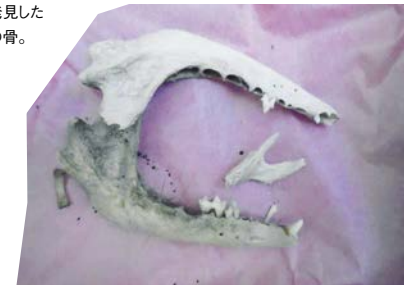
大発見に夢が広がる

バッタ捕りを目的に散歩に出かけたところ、動物の顎の骨らしいものを見つけた。「黒い毛がついている」「歯がついている」等、子どもたちは様々な気付きを発信した。いろいろな動物を想像したが、一人が「恐竜だ」と言ったことで、クラス全体が「きっと恐竜に違いない」という期待感でいっぱいになった。骨はクラスの宝物になった。

挫折感から興味が薄れていく

教師は、この骨が何の骨なのかを追求していくことで、この遊びが学びにつながっていくのではないかと考えた。発見の2週間後に動物園への遠足が予定されていたので、「動物園の飼育員さんに見せてみよう」と提案すると、子どもたちは「それがいい」と期待をもって遠足に臨んだ。

飼育員さんは、「これはタヌキの仲間です」と教えてくれた。予想外の答えにがっかりした子も多かった。その後もタヌキの骨は宝



一番はじめに発見したタヌキの下顎の骨。

下顎の骨を見つけた場所を再訪し，発見したタヌキの頭蓋骨。

物として大事にされたが、興味は薄れてしまったように感じた。教師は再び骨への興味が高まることを期待して、動物図鑑や世界地図等を用意しておくことにした。

わかるってすごい

遠足から2週間後、A男がタヌキの骨を見ながら思い出したように、「タヌキの仲間って何だろう?」と図鑑を開いた。タヌキの仲間は「ホンドタヌキ」と「エゾタヌキ」の2種類で、「エゾタヌキ」は北海道に生息するとあったので、「ホンドタヌキ」だろうという結論になった。A男は「すごい、わかっちゃった」と得意気だった。そこから、図鑑を見るだけではなく、解説を読むことに関心が高まった。わかったことを伝え合うことができるように、教師が手伝いながら、わかったことを書いて掲示していった。また、降園時の1日の振り返りの時間に、クラスの仲間に報告する機会を設けた。「タヌキ」について調べ、わかったことを書いたり伝え合ったりすることが、子どもたちの遊びの一つになり、「たぬきけんきゅうしつ」と呼ばれるようになった。

とことん追求…

新たな発見が新たな興味へ

「けんきゅうしつ」の遊びが深まるにつれ、「もっと骨を探したい」という気持ちが強くなった。そこで、教師は骨を探す目的で散歩を計画した。すると、今度は頭蓋骨が見つかった。

また、場所を猛禽類の巣のある木の下に移すと、5㎝程度の小さな骨を二つ見つけた。B男がその骨を見て「トンボの骨みたいだ」と言ったことに対して周囲の子どもたちが反応し、「トンボに骨はないよ」「いやあると思う」という論争がおこった。教師はどちらの主張も受けとめて、子どもたちが推測したことを書き出しながら、クラスの仲間に伝えた。これ以降、「けんきゅうしつ」の遊びでは、「骨がある生き物」と「骨がない生き物」を仕分けしていくようになった。教師は動物の骨格がわかる図鑑類を用意しておいた。

実物と図鑑をよく見て大発見

C子とD子が骨をながめながら骨格図鑑を見ていた。教師は、トンボの骨と言われた小さな骨をケースから取り出して観察することを提案した。二人は、骨を図鑑に乗せて、同じ形の骨はないかと探していた。すると、ムササビの骨の関節の部分と一致して見えた。「わかった!!」とC子は大喜びした。クラスで報告すると「すごい」「博士みたい」と仲間から絶賛され得意気だった。この報告をきっかけに、「けんきゅう」に参加する仲間が増え、後に同じ方法で、「家で食べたチキンの骨は鶏の大腿骨」ということもわかった。

根拠を示す

「骨がある」「骨がない」を分類する「けんきゅう」では、予想はするものの、答えが出ないのが悩みとなった。そこで、子どもたちは、自分が食べた魚やチキンの骨を家から持参して、根拠を示すことを思いついた。教師は、子どもたちの遊びの経過をクラスだよりで保護者に知らせ、できる範囲での協力を得るようにした。

日に日にいろいろな骨が集まり、「白いものばかりではなく、透明なものもある」ということや「骨のように見えても違うことがある(腱)」ということなどがわかった。

「けんきゅう」の中で、タコは「骨がない」に分類されていたが、E男は、寿司職人の祖父の話から、「タコには頭に骨がある」ということを主張した。仲間を納得させようと、「冬休みにお祖父ちゃんからもらってくるから」と約束した。しかし、頭の部分は仕入れがなかったとのことで、実物を持ってくることができなかった。そのかわり、母親と一緒にネット検索で調べたことを披露した。

3 まとめ

この実践を通して、学びの芽生えを培うためには子どもたちが常に「?」(問い)をもちつづけられるよう教師が見通しをもって教材の準備をしておくことが必要であると考えた。また、子どもたちの小さな気付きを丁寧に拾い上げ、答えや新たな問いにつながっていくようにすることや、それらを仲間と共有できるようにすることで、同じ課題のもとで協同する楽しさや充実感が味わえるのではないかと思う。

今後も、友だちや家族とともに、挫折や成功体験を繰り返しながら、未知の世界を知る喜びや自信を味わわせていくことを大切にしながら援助していきたい。

宮城学院女子大学構内は自然に恵まれ，小川や，雑木林の遊歩道があり，白鳥が飛来する丸田沢にも隣接。子どもたちはのびのびと自然に触れて遊びを展開している。

「トンボの骨」はむささびの骨かもしれないと仲間に報告する。

図鑑，五十音表などを用意し，自分たちが調べたことを書くことを楽しむ子どもたち。

タイやカツオなど，各校区で生産された旬の魚を使って調理実習をしている。

産学官連携の現場から

愛媛県愛南町の「ぎょしょく教育」の取り組み

［保育園・小学校 全学年］「『ぎょしょく教育』の授業」実践より

愛南町ぎょしょく普及推進協議会

1 はじめに

四国屈指のカツオ水揚げ量を誇る愛媛県・愛南町。ここでは、産官学民（愛南漁協・久良漁協、愛南町役場、愛媛大学、愛南町内の地域諸団体や住民）連携して「ぎょしょく教育」に取り組んでいる。

「ぎょしょく教育」は、愛南町役場水産課・兵頭重徳氏の「もっと子どもたちに魚の魅力を理解することができるしかけが必要ではないか」という思いからスタート。愛媛大学が水産業の学習としてつくりあげたコンテンツだ。

「ぎょしょく教育」には七つの意味がある。

・魚に触れる「魚触」
・魚の生態や栄養などを学ぶ「魚色」
・獲る漁業を学ぶ「魚職」
・育てる漁業を学ぶ「魚殖」
・地域に伝わる祝いタイや飾りエビなど、伝統的な魚文化を学ぶ「魚飾」
・魚を取り巻く環境を学ぶ「魚植」
・そして従来から取り組んできた魚の味を知る「魚食」

これらの「ぎょしょく」により、生産、加工、流通、販売、環境などをトータルに学習し、水産業に関心をもち、水産物の消費へとつなげる教育である。平成22年度からは、愛南町内にあるすべての保育所、小・中学校で「義務ぎょしょく教育」を実施している。

2 実践から

「ぎょしょく教育の授業には、大きく分けて4タイプある。各校

愛南町で養殖されているマダイと天然のマダイを見分ける「魚触（ぎょしょく）」体験。

区で生産される魚を用いた「調理実習」、小学校5年生の社会科「漁業」単元の「社会座学」、水産業の「現場見学」、低学年を対象にした「ぎょしょくパッケージ」。この「ぎょしょくパッケージ」は、魚触ブース（水揚げされた魚に触る）、魚色ブース（食育玩具を用いた魚の解体）、魚職ブース（一本釣り模擬体験）の三つのブースを児童が巡回する体験学習であり、子どもたちに人気で、内容的にも評価の高い授業である。

そこで実際に、「ぎょしょく教育」を推進されている愛南町立城辺小学校校長・木原要子先生と栄養教諭・原田光香先生に話をお聞きした。

原田先生　子どもたちに、魚に親しんでもらうため、毎月10日を「魚魚（とと）の日」とし、給食の献立に、愛南町産の水産物を取り入れるようにしています。今月の魚の日は、愛南町産のひじきを使ったひじきごはんに、愛南町の水産加工会社の方から無償でいただいたタイのあらを使った赤だしでした。そのほかにも、毎月19日の食育の日は「愛南カレーの日」として、毎月第4金曜日は「地産地消の日」として水産物だけにかかわらず、愛南町で獲れたものが給食の献立として登場します。また、ぎょしょくの授業の日程が予めわかっているときは、給食に愛南町産の水産物をつかった献立を提供するようにしています。このようにして給食でも「ぎょしょく教育」をバックアップできれば、と思っています。

お話を伺った愛南町立城辺小学校校長・木原要子先生（右）と栄養教諭の原田光香先生。

マダイの養殖場を見学し，水産業に関する現場をめぐる。養殖場のほかに，市場で出荷場やセリなどを見学することもある。

愛南町産のタイを使ったタイのかまの塩焼きが給食メニューに。これを食べながら「鯛中鯛」を探す。

木原先生　低学年向けの授業ですと、「ちりめんモンスター探し」があります。これは、ちりめんじゃこの中に混在する小さな雑魚を見つける授業です。海にはこんなに小さな生物がいて、一生懸命大きくなって海にいる魚になる、ということを理解させることが目的です。子どもたちは目を輝かせてちりめんモンスター探しに夢中です。また、「鯛中鯛（たいのたい）を探そう！」は、毎年1月に実施しています。これは、給食でタイのかまの塩焼きが出され、身をきれいに食べながらタイの形をした骨を探すというものです。最初は探すのに手間取っていた子どもたちですが、今ではあっという間に見つけてしまいます。きれいに食べないと見つけにくいので、ていねいに食べるようになりますし、箸の使い方も学べます。このような体験によって、魚の命をいただいていることに対するありがたさを実感し、感謝の気持ちをもてるようになります。また、5年生の体験授業ではカツオの一本釣りを疑似体験するのですが、模型とはいえとても重たく、教科書で習うだけでは得られない体験ができるのも魅力です。また、地場産業のこと、そこで働く人の苦労や工夫などを主として愛南のよさを調べ、そのことがキャリア教育にもつながっていきます。

子どもたちが「ぎょしょく教育」のなかで、地域と結びつきながら「こんな活動ができた！」という自信をもち、自分たちが考えて工夫すればいろんなことが広がっていくんだという喜びにつながります。そういったことを小学校のころから大切にしていくと、地域を大切にするようになり、大人になったときにもいろいろなことに取り組んでいけるようになるのではないかと思います。一つひとつは小さな取り組みですが、そういうのが「ぎょしょく教育」のよいところですね。これは、連携している愛南町役場、愛媛大学や、水産関連の会社が、子どもたちに協力してくれます。「ぎょしょく教育」発祥の地として、全国に発信してきた成果を常々感じています。

3　おわりに

今後、愛南町の漁業者が消費地で魚の魅力を語り、水産の現場と食卓を結びつけ、「愛南に行っておいしい魚を食べてみたい！」と思ってもらえるような取り組みをもっともっとすすめていきたいという。より効果的な授業メニューや教材の開発をはじめ、「ぎょしょく教育」をテーマにしたマイスター認定制度の創設、修学旅行や産地交流型ツアーなど、新たな挑戦へのアイデアはつきない。

「ご当地情報局」

今回は、ご当地キャラもご当地料理も熊本県をピックアップ！
ひごもっこすパワー全開のご当地情報局です。

ご当地キャラ Character

肥後っ子
ひごまる
参上だまる〜☆

熊本市
イメージキャラクター
熊本城復興本部長

ひごまる

いきなり団子とは…

小麦粉を練ってのばした生地で，さつま芋と粒あんを包んだものを蒸した，昔ながらの素朴な風味の熊本郷土菓子です。
現在のいきなり団子はあんこが入っているものが主流ですが，昔はさつま芋をだんご生地で包んで蒸しただけの簡単なものでした。
熊本の方言で「いきなり」とは，「簡単，手軽」や「直接」という意味があります。それにちなみ，いきなり団子の名前の由来は，いきなり（突然）お客さんが来てもすぐにつくってもてなせるという意味と，生のさつま芋を輪切りにして，いきなり団子生地で包んで蒸す「簡単につくれる団子」という意味が重なったものといわれています。

熊本では給食にもデザートとしていきなり団子が出ます。さつま芋を使っているので腹もちがよく，生地のほんのりとした塩気と芋とあんこの素朴な甘さが絶妙で，子どもたちにも人気のメニューです。

熊本県のさつま芋収穫量は全国第6位（平成27年産，農林水産省統計）。なかでも，大津町は阿蘇の火山灰質の水はけのよさと適度な保水性を兼ね備えた土壌がさつま芋栽培に適しており，名産地となっています。

つくり方

1

さつま芋の皮をむき1.5㎝の厚さに輪切りにして，塩水に30分つけてアクを抜き，水気をきる。

2

小麦粉，塩，水を耳たぶの硬さくらいになるまでよくこねて生地をつくる。

3

生地を3㎜程度の厚さにのばし，芋とあんこを包んで，蒸し器で約25分蒸す。

プロフィール

名前	ひごまる
身長	2メートル（小さくなることもできます）
体重	不明（測ったことがない）
性別	ひみつ
趣味	お城の散歩
性格	子どもたちと遊ぶのが大好きな優しい性格（怒ったのは，お城が焼かれた西南戦争のとき一度だけだよ）
特技	ダンス（短い足でも華麗なステップができます）

名前の由来

「ひごまる」は，平成19年，熊本城築城400年祭を期に，現代へやってきた妖精です。熊本城のイメージカラーである黒をメインカラーに用い，大きな目や表情，切り絵風の全体フォルムが，親しみやすさを表現しています。
「ひごまる」という名前は，一般公募応募総数6692件の中から選ばれました。

子どもたち，先生へのメッセージ

熊本城復興本部長として，傷ついた熊本城の分まで熊本から元気と笑顔をお届けするまる〜！ぜひ熊本に遊びに来てほしいまる〜★

主な活動

熊本城下にある桜の馬場城彩苑を拠点に活動中だまる〜。ステージではひごまる音頭やひごまるダンスを披露し，“熊本に来てよかった”と実感していただけるおもてなしに励んでいるまる。様々なイベントにも出演し，大好きな熊本をPRしているまる♪

ご当地料理
Dishes

熊本の郷土菓子

いきなり団子

いきなり（突然）のお客さんでも，いきなり（簡単に）つくれる！

生活・総合への提言

「生きる力」を育むために
〝生活／総合〟による学習活動に期待

ジオラマづくり「わたしたちの街」という活動実践。学校は，家庭・地域との新たな連携を構築。

1　学校を取り巻く教育力をこそ

近年の少子化・都市化・核家族化等の進行、情報化社会の進展、さらには市町村合併による地域社会の仕組みの変化や共働き家庭の増加などを社会的背景として、地域社会の人間関係の希薄化が進み、家庭や地域の教育力の低下が指摘されている。このことは、子どもたちの成長にも大きな影響を与えており、「学ぶ意欲」「自尊感情」「規範意識」「体力」「コミュニケーション能力」等の低下の要因ともなっている。

子どもたちは様々な人間関係の中で、集団のルール、公共心や規範意識、勤勉性や自己抑制の力などを身に付けていくものである。したがって、学校は家庭・地域の教育力をいかに取り込んでいくかを忘れてはならない。一人ひとりの子どもたちが大人や異年齢の友だちと交流し、豊かな生活体験・社会体験・自然体験を積み重ねていくことは重要である。そして、社会がますます変化する中、今後こうした子どもたちに身に付けさせたい「生きる力」を育む環境づくりを進めていくためには、〝生活／総合〟による学習活動に期待するところは大きい。学校には、周囲との「支え合い（協働）」や「つながり合い（共有）」を大切にしつつ、家庭・地域との新たな連携体制を構築していくことが求められよう。

2　家庭教育への支援をこそ

家庭教育の自主性を尊重しつつ、教育の原点である家庭の教育力を高めるための支援を進める必要がある。併せて、すべての保護者が自信をもって安心して子育てができるよう関係機関との連携はもとより、社会全体で家庭教育を支援していくことが肝要である。また、家庭教育を支える上で学校の果たす役割は大きく、家庭教育に関する理解を深める場や機会を保護者に提供したり、子育てに不安や悩みをもつ孤立しがちな保護者を支援したり、子育てには関心はあるが学ぶ余裕のない保護者と連携を取り合ったりするなど、子どもたちの基本的な生活習慣の確立や学習習慣の定着を図るための工夫が求められている。例えば、多くの保護者が集まる就学時検診や入学説明会を積極的に活用して、家庭教育に関する学習機会や情報提供を行うなど、様々な取り組みが考えられる。

3　保護者との信頼関係をこそ

昨今の急激な社会の変化は、学校という教育の現場に少なからず影響を与え、子どもたちの学習・遊び・友人関係などの生活環境や様式を変えるとともに、日常生活の豊かさ・便利さに反して新たな問題を引き出している。例えば、保護者が子どもたちの学力向上を願い、教師の授業内容・指導方法に対して不満や要望を表すことはないか。子どもたちの学校での安全や校外での危機管理の実態などについて、万一の場合に備えて理解を得られるだけの組織・体制は整っているか。遅刻や不登校傾向にある子どもがいたり、気付かぬところに「いじめ」が潜んでいたりするなど、生活指導面において

子どもたちは，地域の人たちに支えられて登校。

今こそ、学校へ行こう！

留意すべき事象は生じていないか。保護者や地域住民からの「学校」への期待に対して、明確な根拠や対応をもとにして積極的・継続的に回答・解決を行っているか。

学校というところ、子どもたちが集うからこそ、そこにある。教師たるもの、学びを確かなものにと、一層の研鑽を積まねばなるまい。そして、子どもたちをさらに伸ばすには、保護者との確かな信頼関係を築くことが不可欠である。

例えば、保護者との連携・協力の具体的な手立てに「学級懇談会の活性化」をあげて考えてみたい。近頃では、保護者があまり学校に足を運ばないといったことをよく聞く。しかしながら、入学式や運動会・学習発表会などでの保護者の動きはどうだろう。家族そろって…、ビデオ片手に…、我先にと陣取って…と、いかにも子煩悩な保護者の姿がそこには見られよう。つまりは、授業参観が終わると潮が引くようにさっといなくなり、わずかに残った保護者と担任教師だけで懇談するといった実態をこそ改善し、学級の保護者がみなして集まり、担任教師とともに率直に話し合う機会を実現することが大切なのである。そして、そこでは、教師は学級経営の内容を具体的に伝えたり、必要に応じて保護者に協力を求めたり助言を与えたり、また、場合によっては保護者からの要望を聞いたり苦言を受けたりすることも有用であろう。すなわち、学級全体で直接的に交流の場をもってかかわりを深めるということが、問題事象の未然防止や早期解決に結びつくにちがいない。

九州女子短期大学
子ども健康学科教授
大江康夫 先生

4 学校・家庭・地域の連携・協力をこそ

子どもたちを健やかに育むために、地域全体で学校を支えることができるよう、学校・家庭・地域が連携する体制を構築していくことが大切である。地域住民による学習支援活動や安全確保のための活動等への積極的な学校支援の取り組みや、望ましい生活環境づくりのための家庭教育支援への取り組みは、学校教育と社会教育の新たな関係を築いていくといった意味からも極めて重要である。

かつて、現教育改革が示された際に中央教育審議会答申（平成20年）において、そのめざすべき施策の方向性の一つに「社会全体の教育力の向上」があげられ、地域の教育力の向上が一層必要であると提言された。これからの子どもたちが身に付けるべき「生きる力」を育むための環境づくりについては、学校や各家庭のみならず社会全体で取り組む必要があり、学校・家庭・地域がそれぞれの教育機能を発揮して連携・協働をさらに広げながら、その認識を共有していくことが求められる。

今こそ、学校を取り巻く人たち一人ひとりが、心新たにして学校とのかかわりをより深めていこうではないか。「今こそ、学校へ行こう！」が問われている。

学級懇談会の活性化は，保護者との連携・協力の手立ての一つ。

目の前の子どもたちの笑顔のために，地域全体で学校を支えること。

教育研究機関の現場から

五感教育研究所
室長　高橋良寿

五感教育研究所：
諸感覚に根ざした教育プログラムの普及を目指して10年ほど前に設立。子どもには諸感覚を使って遊ぶことの素晴らしさ・感動を，大人には自然と遊ぶ技能，技術を伝える。同様に，教員向けの初任者研修，校内研修，さらには，認知，介護予防など，社会福祉にも力を入れている。

高橋良寿（たかはし・よしひさ）
五感教育研究所室長。森林インストラクター，キャンプディレクター1級などを保有。五感教育プログラムの普及，指導者育成のため，教育現場でのフィールドワークや研修会，講習会などで講演多数。近年では「自然の中のプログラミングと脳神経の関係」などを研究。

五感教育プログラムとは

草花や木の実など，自然にあるもの様々なものを教材化し，子どもたちがそれらを探し，見つけ，手を動かして工作し，遊びながら諸感覚を磨いていくプログラム。以降，昨年12月に神奈川県横浜市にある「かいじゅうの森ようちえん」の子どもたちと行ったフィールドワークの一部を紹介する。

ケヤキの葉。同じ枝に2種類の葉が付いている。種が付いていてプロペラ状のものは枝の先端に付く。枝の先端に付いていれば風が吹いたとき，種を遠くまで飛ばしてくれる。

対生（一つの節に2枚向かい合って葉が付くこと）の植物を見つければ，こんなふうに切ってすぐヤジロベエができる。関連して互生，輪生などの言葉と意味を，遊びを通して教えていきたい。

「ガリガリひこうき」のつくり方を説明する高橋先生。やすりで指を使い，圧力をかけて感覚を味わうことで子どもたちに情報がインプットされていく。

大事に至らないようしっかり見守りながら，いろいろなことにチャレンジさせる。小さなけが，失敗も，経験した方がかえって明日の大事な糧になる。

ガリガリこすって。「回れー!!」

先生方へのメッセージ

あらゆる生物は，自然の中で成長するようプログラミングされています。たっぷり自然と触れ合うことで，子どもたちの脳は正常に機能するようになります。だからこそ，先生方に自然を教材化する技能を身に付けてほしいという思いで，研修に力を入れています。どこかでお役にたてれば幸いです。

好評発売中

日文の書籍シリーズ

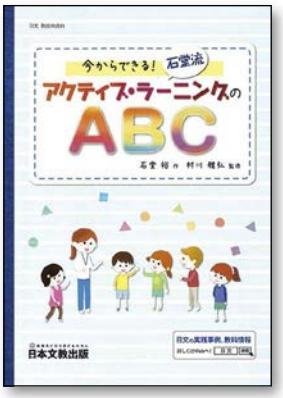
森の学校・海の学校
～アクティブ・ラーニングへの第一歩～

新刊

アクティブ・ラーニングの授業がわかる待望の一冊！

森や海を題材にした全国８地域の小学校の授業を作家が取材し、ルポルタージュ形式に書き下ろした読みごたえのある内容。

編著 NPO法人 共存の森ネットワーク
監修 村川雅弘(鳴門教育大学大学院)
藤井千春(早稲田大学)
定価 1,998円(本体1,850円＋税8%)
A5判　192頁　ISBN978-4-7830-8016-9
発行 三晃書房



今からできる！石堂流
アクティブ・ラーニングのABC

無料配布中

校内研修などで広くお使いいただいています！

アクティブ・ラーニングのABCは日文Webサイト内で無料公開中！

日文　アクティブ・ラーニング　検索

※冊子ご希望の方は、小社大阪本社業務部(TEL:06-6695-1771)までお問い合わせください。

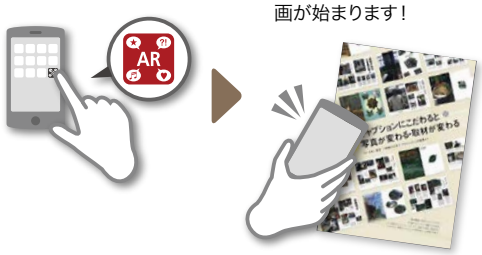
お求めは、最寄りの書店でお願い致します。
※商品のお問い合わせは、お手数ですが、裏面所在地より小社大阪本社業務部へお願い致します。

スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる！

1. スマートフォンまたはタブレットで，ストアアプリを起動します。
2. 「カザスマート」で検索し，アプリをダウンロード。
3. 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
4. AR マークがあるページで紙面全体にかざすと，動画が始まります！

ANDROID APP ON Google play
Download on the App Store

カザスマート 検索



★表紙裏（Belief），P.1（特集）で視聴できます。
※動画は，2017年6月30日まで視聴することができます。

理科の学びを支える「不思議さ」を感じる感性

理科とつなぐ

命がつながっていくことの「不思議さ」を実感させることで，それが科学性の芽生えにつながる。

子どもが抱く，「不思議だ」という素朴な疑問は，科学性の芽生えである。それでは，どのようなときに「不思議さ」を感じるのだろうか。それは，例えば草花の世話をしたり，小さな動物を育てたりして，動植物に深くかかわる体験をしたときなどである。

ヒマワリの種子を土にまいて世話をすれば，やがて力強く土を持ち上げて子葉が開く。茎は日に日にぐんぐん伸びて，子どもの背丈を追い越してしまう。盛夏の頃には見上げるほどの大きさに成長する。種子の芽生えから成長・開花・結実に至るまでの変化に，子どもとともに驚きながら，命がつながっていくことの不思議さを実感させたいものである。

POINT

1. 子どもの「不思議だ」という疑問は科学性の芽生え。
2. 子どもは，動植物にかかわる体験から「不思議さ」を感じる。
3. 子どもとともに変化に驚きながら「不思議さ」を実感させる。

小林 辰至

上越教育大学大学院教授。
1952年，岡山県生まれ。専門は理科教育学。タンポポの教材化に関する研究で，兵庫教育大学から博士（学校教育学）を取得。

生活科を

個としての自立を促す

1年生の生活科の活動では，グループ活動を急いではいけない。この段階では，「自分は何をどのような方法でやり遂げたいのか」という，自分独自の目標と方法を設定し，自分の力でやり遂げようとする意欲を育てることが必要である。そのようにして「取り組む主体である自分」を意識させて，自立への基礎を固める。しかし，子どもたちを個々ばらばらに活動させるのではない。「友だちに自慢できる自分だけのもの」にするという意識をもたせることで，子どもたちのそれぞれの取り組みは意欲的になる。お互いのやり方を観察し，いいところを真似する，違いを出そうと対抗するなど，相互の刺激し合いを引き出すことが支援のポイントとなる。集団活動の中で個の自立を促すのである。

「友だちに自慢できる自分だけのもの」という意識を持たせて活動させれば，子どもたちの取り組みは意欲的になる。
（日本文教出版 平成27年度版生活教科書 上P.79）

社会とつなぐ

POINT

1. 1年生ではグループ活動を急がない。
2. 「自分は何をどのようにして」という主体意識をもてるようにする。
3. 子どもどうしが刺激し合えるように場を構成する。

藤井 千春

早稲田大学教育・総合科学学術院教授。博士（教育学）。1958年千葉県生まれ。茨城大学助教授などを歴任。ジョン・デューイの哲学と教育学を研究。

生活＆総合navi vol.73

日文教育資料［生活・総合］
平成29年（2017年）3月21日発行
編集・発行人 佐々木秀樹
発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

Cover photo：KONISHI TAKASHI
Design：KURAHASHI JUNPEI（PRO-1）
CD33341

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5 TEL：06-6692-1261 FAX：06-6606-5171
東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16 TEL：03-3389-4611 FAX：03-3389-4618
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14 TEL：092-531-7696 FAX：092-521-3938
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B TEL：052-979-7260 FAX：052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1 TEL：011-764-1201 FAX：011-764-0690